

# オルテガ研究の深化と細分化

Insights of the latest Ortegian studies in Japan and their specializations

木 下 智 統

Tomonori KINOSHITA

## 1. はじめに

ホセ・オルテガ・イ・ガセット (José Ortega y Gasset 1883-1955) は、20世紀のスペインを代表する哲学者、思想家である。彼の著作は祖国のみならず、ヨーロッパ、アメリカ大陸、そして日本においても受け入れられてきた。

1933年、彼の思想が我が国に初めて導入されて以降、現在に至るまで、数多くの研究書、研究論文等が発表され、今なお研究が進められている。それらの内容は哲学、思想の分野のみに限定されることなく、実に多岐にわたっており、オルテガ思想の幅広さを裏付けるものとなっている。

筆者は、日本におけるオルテガ思想の初期導入期から現在に至るまでの期間について、この間に展開されてきた彼の思想受容、ならびにその要因の検討を行うため、全期間を四つに区切り、考察を進めてきた。具体的な期間設定は次の通りである。

### ①第一期 (1933年～1955年)

日本におけるオルテガ導入の年から、オルテガがその生涯を終える1955年までの期間。『大衆の反逆』の発刊がこの期間に含

まれる。太平洋戦争、敗戦後の混乱など、学問を取り巻く社会環境は厳しいものであったが、こうしたこの期特有の状況が一部の知識人たちをオルテガ思想受容へと向かわせたことが確認できる。

### ②第二期 (1956年～1975年)

オルテガが他界した翌年からアンセルモ・マタイスが『ウナムーノ、オルテガ研究』を著した1975年までの期間。この期間では、オルテガの幅広い思想分野のそれぞれに光が当たり始め、オルテガ思想の受容が大きく進展した。また、白水社から刊行された邦訳『オルテガ著作集』の登場は、あらゆる分野の人々にオルテガの思想にふれる機会を与えた。

### ③第三期 (1976年～1992年)

第二期の継続となる1976年から、「スペインイヤー<sup>1</sup>」と言われた1992年までの期間。

1 ス페인イヤーとは、コロンブスの「新大陸到達」、またイスラム勢力から国土を完全に回復した年である1492年から500周年目にあたる、1992年を指す。長きに亘る国内の混乱は内戦、独裁体制へとつながり、スペインに暗い影を落としたが、

前期と同様、引き続きオルテガ研究は進展を見せるが、特に1992年に至るまでの数年間は過去、類を見ないほどの論文、著書、雑誌記事などが公表され、一般社会においてだけでなく、学術の領域においても大きな盛り上がりを感じる期間となった。

#### ④第四期（1993年～現在<sup>2</sup>）

1993年から現在に至るまでのこの期間には、世紀末、新世紀が含まれるため、20世紀を概観、総括する視点からオルテガの大衆社会論が取り上げられるなど、他の期間にはない時間的な独自性が確認できる。

以上、日本におけるオルテガ研究の歩みについて、独自に四つの期間を設定し、すでに第一期から第三期までについてはそれぞれ検討を加えてきた<sup>3</sup>。このため、本論考では、残された1993年から現在に至るまでの第四期を対象として、この期間におけるオルテガ思想受容の展開と特質についてその一端を浮き彫りとする。

## 2. 第四期におけるオルテガ思想受容について

### 第四期におけるオルテガ思想受容の展開と

1986年の欧州連合加盟以後、徐々にその存在感を取り戻しつつあった。そしてこの年、イスラム文化が色濃く残る南部の都市、セビーリャで万国博覧会を開催、また、新しいスペインを感じさせる雰囲気に満ちた都市、バルセロナでオリンピックを開催し、世界的に大きな注目を浴びた。

ただし、資料入手の関係上、2012年までとする。

オルテガ思想受容をめぐる考察については、それぞれ拙稿、「日本におけるオルテガ思想の初期受容—その過程と要因に関する一考察—」（第一期）、「日本におけるオルテガ研究の進展」（第二期）、そして「社会学におけるオルテガ」（第三期）を参照されたい。

2 ただし、資料入手の関係上、2012年までとする。

3 オルテガ思想受容をめぐる考察については、それぞれ拙稿、「日本におけるオルテガ思想の初期受容—その過程と要因に関する一考察—」（第一期）、「日本におけるオルテガ研究の進展」（第二期）、そして「社会学におけるオルテガ」（第三期）を参照されたい。

特質について、詳細な検討を加えていくにあたり、まずは、1993年から現在に至るまでの二十年間に刊行されたオルテガに関連する論文、研究書、翻訳そして雑誌記事等について、第三期との比較を交えながら簡単にまとめておく。

第三期の最終年である、1992年はスペインが世界から大きく注目を浴びた年であった。すでに我が国では、この五年ほど前からオルテガ関連の出版物は、急激な増加傾向を見せ、それまで年に四作程度であったのに対し、多い年でおよそ二十作もの出版物が登場するようになった。こうしたことから、スペインイヤーが日本におけるオルテガ思想受容に影響していたことは明らかである。それではこうした動きは第四期にはいるとどのように推移したのであろうか。1993年以降の出版物の数を見ると平均しておよそ八作程度が毎年刊行されていることが確認できる。つまり、スペインイヤーという外部要因が影響を見せない段階のおよそ二倍の刊行物が第四期では著されるようになったのである。そしてこの傾向は多少の変動はあるものの現在まで続いている。だが、こうした変化は単にスペインイヤーによる影響ととらえるのは正しくない。スペインイヤーの影響に加え、原語での対応が可能となった研究者の増加、翻訳の充実、そして幅広い分野へのオルテガ思想の浸透といった様々な要因が影響していると考えべきであろう。

では、第四期に刊行されたオルテガに関連する論文、研究書、翻訳そして雑誌記事等について、オルテガ思想受容の観点から特筆すべきものを取り上げていく。なお、それぞれの著作物が扱う内容を基に、オルテガ研究の対象分野を、主流分野、継続分野、そして新しい分野の三つに分け、検討を行う。

### 3. 第四期におけるオルテガ研究の主流分野

第四期におけるオルテガ研究についてその主流分野といえるもの、それはやはりオルテガ自身の主たる研究分野であった哲学、思想の分野である。ここではオルテガ思想が日本において初めて受容された段階から第四期においても変わらず研究が進められ、「生・理性主義」などをはじめとするオルテガ哲学の基本的なテーマを基にした研究のさらなる深化と細分化が認められる。それでは、そうした研究を提示した中の一人として、まずは杉山武を挙げたい。

杉山のオルテガに対する評価はそれまでになされてきたものとは一線を画す。

オルテガの最大の功績は、スペインで、スペイン語による近代的哲学思考を根付かせたことにある。ドイツ流の緻密さには欠けるにしても、オルテガの思想にはスペイン流もしくは地中海流、要するに自分の哲学がある<sup>4</sup>。

それまでのオルテガに対する評価を簡潔にまとめると次のようなものになるだろう。第一には、文体、言葉使いが秀逸であること。第二には、哲学という一つの学問分野にのみ止まらない幅広い分野に対する深い考察を展開したこと。そして第三には、社会に対する鋭い洞察力とその深層をあぶりだす緻密な分析力を有していたこと、などが挙げられる。だが、杉山の評価はオルテガの功績と独自性へと向けられている。無論、杉山は先に挙げた三つの一般的な評価を否定しているわけではなく、むしろそうした評価を前提としてさらに一步、踏み込んだものとして理解するのが正しいだろう。

4 杉山 武「訳者の周辺『ライプニッツ哲学序説』」, p.232.

また、この文章の冒頭で杉山が述べていることも実はあまりなされていない指摘である。

本邦では『オルテガ著作集』をはじめ数々の単行本によって、オルテガの主要作品の翻訳はほぼ出揃っている。しかしその研究はそれ相応に進歩していないのは残念である。

杉山はこのことについて詳細には述べてはいないが、筆者がこれまでのオルテガ研究から推測するには、日本におけるオルテガの哲学、思想面についての研究が、(a) ヨーロッパをはじめとする他国との研究と比べて、さほど進んでいない、(b) オルテガの主著である『大衆の反逆』が多くの研究者に扱われるようになった半面、社会学的な面だけが扱われ、他の豊穡な分野が置き去りにされつつある、といった理由が挙げられるだろう<sup>5</sup>。しかしながら、杉山の論文について丹念な検討を加えていくと、これらの理由に加え、(c) 何よりも本来、扱われてしかるべきテーマを十分に検討していない、という問題意識を杉山が持っていたのではないかとの印象を受ける。そしてその問題意識を論文という形で世に問うたのである。では、日本におけるオルテガ研究が本来、扱うべきテーマとは何であるか、このことを杉山の論文から明確にしておく。

杉山はオルテガが提示した哲学的テーマ

5 しかしながら、このことの解決は極めて困難であると言わざるをえない。日本における「哲学」とは長きにわたり、ドイツ、フランス、そしてイギリスなどにおける哲学をその中心として据えたものであるため、「スペインの哲学」はあまりに馴染みがなく、接近は容易ではない。そもそも哲学という学問自体、今日、我が国においてはますます軽んじられる傾向にあることは何人も否定することができないであろう。加えて、語学面からみればスペイン語が日本で学ばれる主要言語でないことも大きく影響している。

のうち、「生・理性<sup>6</sup>」、「歴史的理性<sup>7</sup>」、そして「根源的実在<sup>8</sup>」について丹念に考察を進めている。だが、これらのテーマはオルテガ哲学が日本に導入された初期段階から解説されてきたものであり、テーマだけに限って見れば、もはやこの時期においては新しいテーマとは言えない。しかし、杉山はこうしたテーマ、それぞれの解説を行うわけではなく、オルテガがどういう目的でこれらのテーマを考え、どのように自身の哲学を作り上げていったかを明らかにするために、考察の対象としたのであった。「オルテガにとって最大の哲学的課題は、デカルトにはじまりドイツ観念論において頂点に達した観念論・主観論の克服であった<sup>9</sup>」ことから、杉山はこの解決のためにオルテガが辿った思想の変遷をデカルトからカントへと段階を追って示し、一般に、「カント主義を乗り越えた<sup>10</sup>」と言われる過程の一端を明らかにしたのである<sup>11</sup>。カント主義を乗り越えた先にあるもの、それこそが杉山がオルテガについて「自分の哲学がある」と評した理由であった。

次に、オルテガ哲学の基本的なテーマを基にした研究から、さらなる深化と細分化を進めている研究者として、長谷川高生を挙げる。

第四期以前、すでに学術の世界ではオルテガに関する数多くの研究論文が発表され、オルテガ研究は大きく進展していた。しかしながら、オルテガの思想や彼の哲学的テーマについて、包括的に解説する一般書<sup>12</sup>はまだ希少であった。こうした状況は第四期に入り、長谷川が著した『大衆社会のゆくえ オルテガ政治哲学：現代社会批判の視座』などの刊行によって変化を見せ、広く一般の人々にもオルテガの思想にふれる機会が与えられることになった<sup>13</sup>。すでに、オルテガの著作のうち、主要なものから細かなエッセイに至るまで数多くのものが翻訳されていたが、こうした包括的な解説書の登場はオルテガ思想への接近をより可能なものとした。この意味で同書が果たした功績は極めて大きいと言える。

また、長谷川が同書の副題に「オルテガ政治哲学」という新たな分野を打ち立てていることも見逃してはならない。長谷川の論文を紐解いていくと、オルテガの思想分析やオルテガが提示した大衆社会の分析から歩みを始めるも、その視点は多くの場合、大衆と大衆によって構成される社会、そして民主主義をはじめとする社会体制へと向けられており、ここからオルテガを介した政治哲学を模索する考察へとつながっていくのである。こうした思想的変遷は、新しい形態としての大衆社会の到来とそうした社会が深層において抱える問題点を指摘したオルテガにおいても同様に見られる。オルテガは、本来あるべき姿へと社会を導くには、政治が果たす役割を十分、認識していた。事実、彼は思想面からの

6 『『生の理性』について：オルテガによる新しい形而上学の試み』にて扱われているが、杉山は「生・理性」ではなく、「生の理性」と訳出している。

7 『『歴史的理性』について：人間存在の歴史性の探究』にて扱われている。

8 「根源的実在」は先の二つのテーマと深い関連性があるため、それぞれの論文で扱われているが、後に単独で扱った論文として「オルテガにおける<根源的実在>」がある。

9 『『生の理性』について：オルテガによる新しい形而上学の試み』、p.115。

10 渡辺 修『オルテガ』p.36。

11 なお、オルテガによるデカルト批判については、他に、木下登「オルテガの合理主義哲学批判と『生・理性』について」、カント主義研究後の独自性については渡辺の前掲書、pp.36-37。もしくは、色摩力夫の『オルテガ』内の「その独自性」pp.6-9.を参照されたい。

12 包括的という観点から言えば、色摩力夫の『オルテガ 現代文明論の先駆者』がそれにあたる。

13 ただし、長谷川の著作は同書のp.278に掲載されている通り、大部分が自らの論文を加筆、修正したものであるため、解説書というよりは研究書の色合いが強い。一方、より一般の人々を対象とした解説書としては、渡辺の前掲書がある。

社会への働きかけだけではなく、自ら政治の場へと身を投じ、政治家として社会の変革を志したことは周知の通りである。このように考えてみるとオルテガの政治、もしくは長谷川が提示したオルテガ政治哲学という分野が本来、オルテガの主たる考察分野であった哲学、思想と同様に一つの独立した分野として扱われるべきものであるとの結論に至る。

最後に、オルテガの哲学分野における新たな研究の提示者として、木下登について触れておきたい。木下はオルテガの哲学に関する論文を著した後、オルテガとハビエル・スピリ・アパラテギ（1898-1983）の思想比較を扱っている。スピリはオルテガを師としてその下で学位を取得、その後、マドリード大学の教授に就任、オルテガ、ウナムーノとともに現代スペインを代表する哲学者として知られている。「スピリの思想展開は、その第一段階においてオルテガの知的導きがあったことにより多くの可能性を獲得したこと<sup>14</sup>」から、オルテガの薫陶を受けた次の世代への研究の進展はオルテガが持つ、新たな一面の発見につながる可能性を有している。こうして日本におけるオルテガ研究に新たな方向が加わり、オルテガが遺した次なる思想の系譜が展開されていくこととなる<sup>15</sup>。

#### 4. 第四期におけるオルテガ研究の継続分野

第四期のオルテガ研究において、研究の主流分野とは言えないまでも前期までと同様に継続的な研究が行われている学問分野がいくつか挙げられる。それは文学、歴史学、司

書学、教育学（大学論）、そして芸術などであるが、これらの分野に共通していることは我が国におけるオルテガ受容の早い段階から研究が開始され、そして一通りの検討を終えていることである。つまり、現段階においては研究の継続性こそ認められるものの、かつてような旺然たる様を確認することはできない。一方、先に挙げた、継続的な研究が行われている学問分野と同様に、主流分野と言えるほど研究が盛んに進められている訳ではないものの、この時期において研究の進展が見られる学問領域がある。それは分野としての明確な線引きは難しいものの、あえて定義すれば社会思想の分野である。これはオルテガが主著、『大衆の反逆』で展開した大衆論に端を発して、現状の社会分析とその本来の在り方を考察の対象とする研究者たちによって進められている。ここではそうした研究者のうち、西部邁と佐伯啓思について取り上げる。

西部は、日本を代表するオルテガ研究者の一人である。彼は研究者としてオルテガ思想の考察を進めるとともに、広く一般の人々にもオルテガ思想の紹介、解説を行った。このため、彼の著作においてオルテガの名、もしくはオルテガの思想が語られた機会は数知れず、オルテガ思想の伝搬において果たした役割は極めて大きい。

西部が書物として著したもののうち、初めてオルテガ思想が語られたのは、第三期に出版された『経済倫理学序説』であろう。同書は経済学者、ジョン・メイナード・ケインズなどの思想を扱ったものであったが、その中で西部はオルテガをケインズと同様の思想を持っていた存在として登場させている<sup>16</sup>。だが、経済学者と同様の思想とは言え、オルテ

14 木下 登「ハビエル・スピリと『近代哲学の破綻』—現象学を前にしてのスピリとオルテガ（1910-1936）」、p.109.

15 なお、オルテガとスピリの関係性については、木下 登「スペインの現代思想」、pp.133-134.も参照されたい。

16 西部 邁『経済倫理学序説』、pp.57-58.

ガを経済学者として捉えているわけではない。西部は両者が自らの思想を基に、社会に対して鋭い分析と働きかけを行った点から、社会思想という分野における共通性を見出していた。この後、第四期においても西部はオルテガ思想を積極的に取り上げていくが、その主軸は変わることなく、哲学よりも大衆論を中心とした社会思想にあった。ただし、西部によるオルテガ研究は他の一般的なオルテガ研究者とは異なり、考察の帰結を日本社会への批判に求めていることは見逃されてはならない。こうした姿勢はまさにオルテガが哲学のための哲学に陥ることなく、生のための哲学を自らの命題として社会に向き合ったことと相通じるものがある。

さて、西部の批判は社会に対してのみ行われたわけではない。時として彼の批判は彼と同世界の人々、つまり知識人たちへも向けられた。オルテガが専門家に向けて批判を行ったことと同様である。先の社会に対する批判がオルテガの思想を基にした批判であったのに対して、知識人たちへの批判はオルテガの思想を正しい意味で理解せぬまま遠ざけていることへの批判であった。こうした批判が展開されたものとして、また当時のオルテガ思想を取り巻く社会状況を知る上でも、西部が第四期に出版した論文<sup>17</sup>について取り上げておく。

この論文はオルテガの思想解説を行いながらも、全体を貫くテーマは日本の言論界、つまりは知識人と呼ばれる人々に対する厳しい批判である。西部はまず、「大衆の典型を似而非知識人とみなすオルテガは日本では言論界の片隅に追いやられている<sup>18</sup>」と述べ、オルテガを取り巻く日本の社会状況を問題とし

て提起する。ここで問題となるのはオルテガの主著、『大衆の反逆』という題名が人々に与える印象である。これについて西部は、「現代の人々がまず思い浮かべる光景は、それまで虐げられていた群衆がいよいよもって既成の権力に歯向かう、といった類のものであろう<sup>19</sup>」と述べ、一般的な印象に対しての理解を示す。しかしながらこうした印象はオルテガにおいては当てはまらない。オルテガにおいて大衆とはあくまで精神的な分類であり、社会的な身分を基にした分類と無関係であることは周知の通りである。大衆の反逆という題名について、過去の研究者たちの多くが同様の解説を加えてきたのも、こうした誤解を生じさせないためであった。つまり、知識人であれば過去のオルテガ研究と真摯に向き合うことにより、以上のような誤解を避けることは可能である。だが、大衆という言葉が持つ一般的な印象のみによって表面的に解釈した結果、「この書に肯定的な評価を与えることを暗黙のタブーとするという事態<sup>20</sup>」となり、「大衆蔑視の鼻持ちならぬ奇書として、一部好事家がひそかに愛読するだけのもの<sup>21</sup>」となってしまった。西部によれば、『大衆の反逆』のみならず、オルテガの著作は日本の社会において、一部の人々のみにしか受け入れられることはなかったと結論付けられる。こうして西部はオルテガが誤解された現状から日本において大衆批判を行うことの難しさを社会問題として提示したのである。西部のこうした問題意識は日本におけるオルテガ研究の新たな一面として引き続き検討が必要であろう。最後に、オルテガを取り巻く当時の社会状況について、西部の言葉を引用しておく。

17 西部 邁「文明と成熟—西欧近代の裏街道を往く—11-オルテガ—大衆の正体を発く哲学」

18 同上, p.213.

19 同上, p.213.

20 同上, p.213.

21 同上, p.214.

オルテガの著作は、とくにこの日本において、徹底的に無視されている。その著作群が次々と和訳されているにもかかわらず、その言説が日本の知識人から真剣な検討を受けたことは皆無に近い。そうでなければ、マスの訳語にほかならぬ大衆という日本語が、肯定的な意味合いを有した言葉として今も用いられる、というようなことは起こりえなかっただろう。

日本の大衆社会は、オルテガのような大衆批判の思想を一顧だにしないまま闇にほうむったという意味で、実に高度の段階に達している<sup>22</sup>。

続いて、西部と同様、社会思想の分野からオルテガの考察を進めた研究者として佐伯啓思を取り上げる。佐伯は第三期に著した論文において初めてオルテガを扱って以降、幾度かオルテガについて論じている。彼は自らの学問的土台を経済学に置きながら、哲学、社会学そして政治学へと思想の幅を広げている<sup>23</sup>。こうした姿勢から彼が西部を師として、多分に影響を受けたことがうかがえる。しかしながら、佐伯のオルテガ研究はオルテガを中心に据えたものではなく、あくまでも本論を補完する部分的な扱いでしかない。彼の著作や論文のうち、オルテガが関連するものはわずか数点に過ぎないのもそのためである。だが、重要なことは西部によって始められた経済学者からのオルテガへの接近を佐伯も踏襲したことである。つまり、経済学者がより

学際的な立場で研究を進める場合、オルテガはもはや無視できない存在<sup>24</sup>として認知され、彼らの考察対象として各々の領域で扱われるのである。こうしていい意味においても悪い意味においても、オルテガは大衆論の代名詞的存在として、広く浸透したことがうかがえる。

## 5. 第四期におけるオルテガ研究の新しい分野

第四期におけるオルテガ研究、最後は新しい分野、新しい方向性について簡潔に指摘しておきたい。

オルテガの幅広い思想は第四期の段階になっても、未だその広がりや確認できる。しかしながら、第四期における広がりや他の期間と比べると少し異質である。なぜなら、いわゆる理系分野への広がりが見られるためである。つまり、本来、オルテガが考察の対象としなかった範囲においても受容が確認できる。その代表的なものとして、武田邦彦の論文<sup>25</sup>を提示しておく。こうした論文におけるオルテガ思想の扱いは非常に限定された形でしかなく、オルテガ思想の考察を目的としたものではない。言うなれば、言説の紹介という役割でオルテガ思想が提示されるのである。だが、こうした分野での受容はオルテガの思想がますます一般的なものとして、広く浸透していることを示す一方、ともすればオルテガが一般的な教養として認知される段階にまで達したことを意味しているのかもしれない。無論、新しい分野においてもオルテガを直接的な考察の対象として研究を進めて

22 同上, pp.216-217.

23 佐伯ははっきりとは述べてはいないが、おそらく「社会哲学」という学問分野を念頭においているのではないと思われる。だが、学問分類上の不明瞭さから本論では、社会思想として扱う。詳しくは『経済学の犯罪—希少性の経済から過剰性の経済へ』内の「あとがき」を参照されたい。

24 佐伯は「話がここまでくれば、大衆論の古典というべきオルテガの『大衆の反逆』に、どうしても触れないわけにはいかないでしょう。オルテガこそは、現代の大衆という現象に正面から取り組んだ思想家だからです」（『経済学の犯罪—希少性の経済から過剰性の経済へ』p.154.）、と述べている。

25 武田邦彦「環境と高分子材料」、p.109.

いるものもあるため、第四期以降では、オルテガ思想がどのように扱われているのか、丹念な検討を行っていかなくてはならないだろう。この意味で、オルテガ思想の広がりには新たな段階を迎えたと考えられる。

## 6. 結論に代えて

第四期において、オルテガが展開した幅広い思想がどのような受容を見せ、またそこにはどのような特質が認められるか、こうした点について考察を進めてきた。最後に、一連の過程で明らかとなった点について指摘を行い、本論考の結論に代える。

第四期において進められたオルテガ研究について、その内容を精査した結果、研究の対象をそれぞれ、主流分野、継続分野、そして新しい分野の三つに分けて進めることが望ましいとの判断に達した。これは他の期間と比べて、明らかにオルテガ研究の傾向に学問分野別の偏りが確認できたためである。このような状況において、まず、主流分野として取り上げたのは哲学である。オルテガ自身の主たる研究分野であった哲学では、オルテガ哲学の基本的なテーマを基にして、新たな見直しやさらなる深化、発展が確認された。特に、それまで具体的に論じられることがなかったオルテガ哲学の構築過程の一端を明らかとした研究は特に重要である。次に扱った継続分野では、この時期において研究の進展が見られる学問領域として、社会思想の分野について検討した。哲学の分野とは違い、多くの研究者たちが関わっている分野ではないものの、この時期において明確な進展が見られる学問領域であることが確認された。また、研究面においてだけでなく、オルテガの思想の伝搬において、この分野の研究者たちが果たした役割も忘れてはならない。そして最後に、新しい分野として、本来、オルテガが考

察の対象としなかった範囲における受容を扱った。この検討により、他分野においてもオルテガ思想が一般的なものとして、広く浸透していることが確認された。

## 参考文献

- 長谷川高生『大衆社会のゆくえ—オルテガ政治哲学：現代社会批判の視座—』ミネルヴァ書房、1996年。
- 木下 登「オルテガの合理主義哲学批判と『生・理性』について」『アカデミア』人文・社会科学編53, 1991年, pp.55-79.
- 「ハビエル・スピリと『近代哲学の破綻』—現象学を前にしてのスピリとオルテガ(1910-1936)」『アカデミア』人文・社会科学編59, 1994年, pp.89-118.
- 「スペインの現代思想」『現代スペイン読本』丸善, 2008年, pp.126-135.
- 木下智統「日本におけるオルテガ思想の初期受容 —その過程と要因に関する一考察—」『金城学院大学論集』社会科学編9 (1), 2012年, pp.130-139.
- 「日本におけるオルテガ研究の進展」『金城学院大学論集』社会科学編9 (2), 2013年, pp.94-101.
- 「社会学におけるオルテガ」『金城学院大学論集』社会科学編10 (2), 2014年, pp.150-159.
- 西部 邁『経済倫理学序説』中央公論社, 1983年。
- 「文明と成熟—西欧近代の裏街道を往く—11-オルテガ—大衆の正体を発く哲学」『諸君』27 (2), 1995年, pp.213-221.
- 佐伯啓思『20世紀とは何だったのか：「西欧近代」の帰結』PHP研究所, 2004年。
- 『経済学の犯罪—希少性の経済から過剰性の経済へ』講談社, 2012年。
- 杉山 武「『生の理性』について：オルテガによる新しい形而上学の試み」『広島修大論集』人文編40 (2), 2000年, pp.115-152.
- 「『歴史的理性』について：人間存在の歴史性の探究」『広島修大論集』人文編44 (1), 2003年, pp.431-470.
- 「訳者の周辺 『ライブニッツ哲学序説』」『イスパニア図書』9, 2006年, pp.232-233.



- 「オルテガにおける<根源的实在>」『広島修大論集』人文編47（2），2007年，pp.87-122.
- 武田邦彦「環境と高分子材料」『材料』54（1），2005年，pp.104-111.
- 渡辺 修『オルテガ』清水書院，1996年.